

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月13日(金)

### 《私達がイエス様を迫害してしまう》

福音の話をする前に、第一朗読（使徒言行録 9・1-20）について考えてみたいと思います。二つのことについて考えてみましょう。一つはサウロがまだパウロと名乗らなく、ダマスコというところでイエス様に出会います。サウロは迫害するために動いている道でイエス様と出会ったのでした。「あなたはどなたでしょうか。」と言うと、イエス様が答えられます。「おまえが迫害しているイエスである」と。

ここでの迫害とはどういう意味でしょうか。ちょっと深刻に反省してみますと、イエス様の御旨に反する行動とか心とか、全てが迫害になるのではありませんか。私達は、迫害するその加害者の立場にあるかも知れないと、いつも気をつける必要があると思います。もしかして、「互いに愛し合いなさい」とおっしゃったその話に反して「互いに憎み合っている」と、それは、私が直接イエス様を迫害してしまうことになるかも知れません。今は平和な時代と言われていますが、ある意味で、私達自身がイエス様を迫害してしまう、そういう面がないのかと、振り返る必要があると思います。「私の言葉を宣べ伝えなさい」と私達は言われていますが、自分の弱さ自分の恥、色々なことを言い訳にしながら、本当に手を伸ばさなければならない人に、全然何も動きを見せなかったことも一つの迫害かも知れません。

さあ二番目、イエス様はアナニアをサウロのそこへ行かせます。そこでアナニアは言います。「あの人は私達を迫害した者でしょう。なぜその人を私が助けなければならないのでしょうか、それはあり得ません。」皆様は、サウロの立場が理解しやすいのでしょうか。それとも、アナニアの方が理解しやすいのでしょうか。アナニアの方だと思います。この言葉を聞いて私達が考えなければならないのは、イエス様の考えは私達とは違うということです。ですから自分の考えに執着して、自分のことばかりを主張しようとする、責めようとするところからいつも解放されなければなりません。私はこれでいいと思いながらも、誰もがこれが常識だと思いながらも、間違えている可能性が沢山あることを、いつも気をつけながらこの第一朗読を通して考えてみたいと思います。

そうです。イエス様は常識に反することを、私達に要求して来るかも知れません。私達はやられています。しかし、それでもイエス様は、その人を救いなさいとおっしゃっている。極端なサウロとアナニアの例えだったのですが、具体的に私達の共同体の中にも沢山起こり得る話です。「あの人本当に嫌だ。だけどこちらが先に手を伸ばしなさい。」「いやこれはプライドの問題で、何々のことでやってあげてもその人は逆に返します。」と、色々なことを言いながらイエス様を断っていることです。ある意味でこれも一つの迫害だと思います。とにかく優しいことではありません。し易いことではありません。どの人でもこういう立場であれば本当にいやな気持ちで苦しくなります。しかしイエス様は、今

日の箇所だけではなく数え切れない箇所で、はっきりとこのような話をしています。一番極端的な例え話は何でしょうか。泥棒も自分の愛する者には良くやっている。そうしたら何に違いがあるのでしょうか。というこの言葉をもう一度思い出しましょう。

さあ、今日の福音（ヨハネ 6・52-59）について一言だけ申し上げます。「わたしの肉、わたしの血」この言葉はどのような意味でしょうか。「なぜあの方は自分の肉を食べなければならないと言っているのか」議員達がファリサイ派の人々が話し合ったと書いているのですよね。そこで私達信者ならばどのように説明しますか。「イエス様の肉、イエス様の血」これを未信者の方にどのように説明できるのでしょうか。はっきり申し上げます。この肉というのは口だけではなく具体的な振る舞いのことを話しています。イエス様が見せて下さった具体的な心、具体的な模範、それを自分のものにしないで永遠の命は得られないことをはっきりおっしゃっていることです。

皆様私達は、毎回ミサ与かった時、御聖体を頂きます。このご聖体が本当に生きているイエス様の体である為には、私達はその責任を負わなければなりません。具体的にイエス様が望んでいらっしゃる御旨に従おうとする具体的な方法がなくてはいけないことを今日の福音をとして考えてみましょう

ありがとうございました。